

タイトル：Middle Eastern and Islamic Studies in Japan: The State of the Art (No.15)

日時：2025年11月28日（金）10:00～13:00

場所：Japan Center for Middle Eastern Studies, 2nd Floor, A2-1, Azariyeh Bldg, Beirut Central District

報告タイトル：“Politics of Fratricidal Violence in the Lebanese Civil War.”

報告者：岡部 友樹（神戸大学大学教育推進機構グローバル教育センター、特命助教）

1. 報告内容

本報告は、レバノン内戦（1975～1990年）における宗派内暴力（fratricidal violence）に焦点を当て、宗派間対立や外国介入を中心と捉えてきた従来の理解に再検討を加えるものである。既存研究では、キリスト教右派と左派連合、あるいはレバノン諸派間の対立、シリア・イスラエルとの対立が主に論じられてきた一方で、同一宗派内部の対立が戦争の動態や内戦後政治の形成に与えた影響は十分に分析されてこなかった。本報告は、宗派内暴力を「無秩序の副産物」としてではなく、正統性の奪取、領域支配の確立、エリート間競争の調整という政治的再編を促す戦略的手段として位置づける点に特徴がある。とくに、キリスト教民兵勢力（カタリーブ党／レバノン軍団、国民自由党、マラダ潮流）の事例に着目し、①政治的正当性の獲得（legitimacy-making）、②領域支配（territorial control）、③外部勢力との関係性（foreign positionality）の三側面から、エフデンの虐殺（1978）とサフラーの虐殺（1980）の詳細な経過とその政治的意味を考察した。これら二つの事件は、東ベイルート、北部、レバノン山地などの支配権やキリスト教徒内部の指導権をめぐる激しい競争のなかで発生した象徴的事件であり、また、イスラエルやシリアによる選択的支援・介入が内部の亀裂を拡大させた点も指摘した。

2. ディスカッションの概要

コメンテーターを引き受けていただいた Dima de Clerck 氏（レバノン内戦史研究）からは大別して以下の重要な点をご指摘いただいた。1つ目に、歴史資料の活用方法の再検討である。ベイルート・アメリカン大学、フランス近東研究所（IFPO）、UMAM Documentation and Research 等のアーカイブを積極的に活用すべきである。2つ目に、研究の位置づけの明確化である。雑誌論文としての公刊を目指すのか、博士論文として体系化するのにかにより、研究計画が大きく変わる。3つ目に、歴史的文脈の厚みの不足である。各事件に至る政治・社会・軍事的背景のさらなる補足が必要。4つ目に、他地域比較の慎重な扱いである。中東他地域の比較事例は本研究の焦点をぼかす可能性があるため、言及を抑えるべき。5つ目に、レバノン内戦の特性の理解である。「国家 vs 反体制勢力」という単純な構図ではなく、複数の武装勢力がほぼ対等な力関係で戦った多極的な内戦である点を押さえる必要。6つ目に、Robert Fisk 氏の記述の扱いに関してである。ジャーナリズムの記述を用いる際の批判的読

解が重要。7つ目に、理論的視座の拡張である。集団内暴力はグローバルに観察される現象であり、そのなかでのレバノンの特異性と本研究が取り上げる意義を明確化すべき。8つ目に、アイデンティティ・ポリティクスの視座についてである。宗派・地域・家族ネットワークの政治動員を説明する上で不可欠との指摘。

また、東京外国語大学の黒木氏および Mostafa Khalili 氏からも有益なコメントをいただいた。1つ目に、エスニシティの理論的整理である。本質主義（essentialism）と構築主義（constructivism）の区別を踏まえ、多様なアイデンティティがどのように動員されるのか理論的に位置づける必要がある。2つ目に、「集団内暴力」概念の再検討についてである。一見、集団間暴力の枠組みを乗り越える概念に見えるが、「集団の内部統一性」を前提化してしまう危険があり、分析上の慎重な定義づけが求められる。3つ目に、比較の可能性である。クルド勢力間の内部闘争など、他の非国家武装勢力における集団内暴力との比較研究の可能性が指摘された。

3. 会議参加の感想

本研究テーマは、レバノンでの複数回のフィールドワーク、文献調査、そして内戦研究者との対話を通じて形成されてきたものであり、レバノン社会においても大きな意義を持つと改めて感じた。一方で、内戦を経験した当事者にとって、宗派内部で起きた暴力は多くの場合「語りづらい」タブーであり、研究上の制約も大きい。

それでも、歴史的記録を掘り起こし、一次資料（とくにアラビア語史料）を体系的に収集することによって、内戦の複雑性、宗派間・宗派内政治の動態、そして内戦後政治への影響をより正確に描写できると考えている。今後は、いただいた貴重なコメントを踏まえ、理論的視座を精査しつつ、論文としての刊行を目指して研究を進めたい。

最後に、今回の貴重な機会を提供してくださった黒木先生・後藤先生、建設的なコメントをいただいたコメンテーターの先生方、そして共に発表した岩田さん・山岡さんに心より御礼申し上げます。